

## 現代青年の生き方に関する人間科学的研究

## —実存的視座に基づいて—

A Human-Scientific Study on the Attitudes toward Life of Modern Japanese Youth  
—From the View-point of Existential Perspective—

加藤 陽子 (Akiko Kato) 指導：嵯峨座 晴夫教授

1990年代後半、青年による凶悪犯罪が相次ぎ、“かつてとは様相を異にする青年の増加”が社会的に注目を浴びた。近年においても、依然として現代青年のあり方は憂慮され続けている。こうした現状を受けて、様々な立場から青年の実態を把握するための研究が行われているが、現在の青年期研究の多くは、社会的な側面または発達の側面のどちらかに言及する手法が多数を占めており、青年の生き方やあり様について包括的に論じた研究が少ない。またさらに、一般に現代青年を捉えようとするとき、その見解や言説の多くは、社会の成熟に伴う社会構造の変化が生み出したかつてとは様相を異にする青年の姿＝生き方に対する積極的な態度の喪失をクローズアップする傾向にある。

しかし、人間は数え切れない身体的・心理的・社会的・精神的諸要素を抱えながら相互に極めて複雑に影響し合い、自らの中でそれらを統合し、同一性を見出す存在である。そのため、多様な側面を持つ人間存在を多種多様な状況・分野ごとに要素に分断するという従来の研究方法では、現代社会における青年の存在は語りえない。したがって、現代日本社会における青年たちの存在あるいは様相を今一度明確にするためには、人間の存在全体を把握する人間科学という研究による彼らの捉え直しが必要だといえる。そしてその中でも、多様な現代社会の下で、主体的に自らの人生を選択し創造して生きていくという、人間の積極的側面を支持する実存的視座を持つことこそ、消極的なイメージで捉えられがちな現代青年を従来の研究とは異なる視点から語る上での1つの有効な手立てとなるといえる。

そこで本稿では、現代青年の実態を明らかにし、実存在的な視座から現状と問題点の検討を行うことで、現代社会における青年の様相を包括的に考察することを目的とした。

まず第1章においては、現代青年をとりまく社会的な背景についての整理をおこなった。社会の脱産業化が進行するにつれて、青年たちを取り巻く環境は大きく変化した。中でも顕著なのが、ライフスタイルの緩慢化と消費資本主義社会の拡大である。ライフスタイルの緩慢化は、子どもから青年、大人という明確で段階的な移行を喪失させ、それぞれの境界線を曖昧にした。その結果、現代青年は自らの立場の曖昧さからモラトリアムへの安住の度合いを強め、時間的な展望の拡散状態にあるといえる。また、脱産業化

した今日の消費社会では、自己意識的であるという「青年性」を利用する市場が、差異化キャンペーンを繰り返す。そのため、青年たちはモラトリアムという安住の地から引きずり出され、常に“自分らしさとは何か”といった自己探求の繰り返しを強いられているといえる。つまり現代青年は、“拡散していく曖昧な立場の中で永続的な自己探求を行わなければならない”という今日的苦悩を抱えているといえるだろう。

こうした現代青年が持つ今日的苦悩は、近年の青年研究においては、私的価値を重視しながらも他者との関係を欲しているというアンビバレントな姿だとされ、心的負担のコントロールの表れであるとされてきた。しかし、彼らが置かれている状況を勘案すると、現代青年のアンビバレントな姿はより強く自分らしさを求めるがゆえの姿だとも考えられる。つまり、彼らに特有の今日的苦悩をあたえている影響因子である、青年という存在や期間の指標の喪失、および自己意識的な青年性とそれをいっそう活発化させる消費社会との軋轢という現代社会の構造こそが、今日の青年がアンビバレントに見える原因であるといえよう。

第2章以降では、従来の研究で指摘されていた消極的な生き方を現代青年は本当に保有しているのかといった視点に立ち、質的・量的調査を用いて青年の現状をより多角的に検討した。

第2章では、戦後の若者論研究の系譜をたどった上で、若者論の一部として議論されてきた大学生像を改めて捉え直し、彼らの現代的な心性に注目した。90年代以降の社会学的青年論では、青年たちが記号的消費に疲れた結果、戦略的にモラトリアムの態度という社会適応手段を身に付け、親密性の深淺や状況によって心理的負担となる生き方や自分らしさを分散・コントロールしていると指摘される。現代の大学生は、先行研究において現代青年論同様の指摘が多くなされていることから、少なからず現代青年のある側面を代表していると考えられる。

そこでまず、大学生が自らの生き方や存在に関する態度を持っているのかどうということについて検討した。対象は242名(M 111, F 131)、調査尺度はPIL尺度(Purpose-in-Life test)のPart-A態度スケールである。その結果、大学生は中程度の生き方に関する実存在的態度を保持しており、

他世代と比較しても決して低くない数値が得られた。このことから、現代青年における自らの生き方やあり方に対する態度が決して消極的なものばかりではないことがうかがえ、生き方に対する態度に関してより詳細で多角的な検討を試みる必要が示唆された。そこで次に、大学生の生き方に関する態度のディテールを明らかにすることを目的に、半構造化面接を行った。対象はPIL得点が平均値の大学生7名(M4、F3)である。その結果、従来の社会学的青年論が、現代の青年はインストルメンタルな親密性の消滅にともない自らの生き方に対する積極的な意味希求を喪失しつつあると指摘しているのに対して、むしろ彼らが他者との親密な関係を求めることで、あるいは親密な関係性に委ねていた自らの存在や生き方への承認を自らの内側に求めることで、積極的に自分の存在や生き方に意味付与を行う姿が見て取れた。つまり、今回取り上げた大学生においては、これまで親密性の深浅や状況によって分散・コントロールしていると指摘されてきた生き方に関する実存的態度は失われていないと同時に、「内面へのコミットメント」を積極的に自らの人生への糧としていくという生き方に関する実存的態度が存在するという示唆が得られたといえる。

次に、第3章であるが、日本における就学率・進学率の高さや学校期に存在論的な問いや苦悩が立ち現れることを勘案すると、この時期の子ども達は少なからず青年の変容の影響を受けていると考えられるため、現在の学校教育において大きな問題となっている不登校問題に注目し、不登校問題に現れているだろう現代青年の苦悩と生き方との関連性について取り上げた。

調査対象は、「不登校にならなかった」大学生405名(M184、F221)で、不登校にならなかった理由についての回想法を用いた自由記述を行った。その結果、主な不登校抑止要因として、親密で特定の身近な他者存在の重要性や個人の持つ内的規範や社会的スキルなどが挙げられていた。また、実際に不登校になりかけたがならなかったものの文脈を分析したところ、不登校抑止の諸要因と生き方に関する実存的態度を自らの内面で関連させて新たな文脈に置き換える、あるいは再解釈を試みることによって、登校行動がより明確に本人に意味付けられ、不登校気分からの脱却のきっかけとなるという傾向が見られた。つまり、不登校という問題を通して見たとき、現代青年の内面には積極的な生き方に対する意味付けの過程が見受けられたといえる。この過程からは、現代青年の内面に、これまで指摘されてきた消極的な生き方とは異なる側面、すなわち積極的に自らの生き方を見出そうとする生き方に関する実存的態度が存在することが明らかとなった。

また、第4章では、同居未婚子について取り上げた。法律的には成人している年齢である青年たちが未婚のまま親

と同居しているという現状は、結婚あるいは経済的な自立を先送りしているという点においてモラトリアムに安住している現代青年の側面を現している。特に、未婚子の親との同居という状況は、親が結婚しない未婚子の経済・家事の側面での親への依存を許す限りにおいて維持できるものであると考えられることから、親世代から見た同居未婚子への評価や意識について主に取り上げ、検討した。

対象は261人(M143、F118)で、世代間居住形態に関する一連の調査項目の該当データを用いて分析した。その結果、親と同居未婚子の関係における特徴として、子や親の就業にかかわらず、家事・経済の面で子どもの親への依存が見られた。また、結婚していない子どもは、年齢が高くとも親と同居して依存を続けており、親はこうした子どもを未独立な存在と認識し、同居に対して違和感を覚えていないことが明らかとなった。以上の結果から、未婚・同居によって生活基盤を親に依存する同居未婚子と、その状況を未独立な状態とみなすことで親役割を確保し許容している高齢者との関係は、双方にとって非常に戦略的で今日的な親子関係であることが示唆された。また、同居未婚子と親とのモラトリアムの互惠関係という戦略的な親子関係は、現代青年に“自分らしくあるがままに生きる”という積極的な自己選択を可能にさせているという実存的な側面も含有していた。

終章では、以上の結果を踏まえ、まとめと総合考察を行った。大学生・不登校問題・同居未婚子を通して実存的な視座から現代青年の様相を捉えたとき、社会的に不適応状態に思える現代青年は、内面において積極的な意味付けへと構築し直す過程(=生き方に関する実存的態度の獲得過程)が存在していた。しかし、現代の研究の多くは、こうした生きることを意味付ける「何か」を中心とした現代青年の捉え直しという視点を喪失しており、このことが、現代青年の様相を捉える際に表面的な消極的適応という見解へと導いてしまう要因だといえる。すなわち、現代青年が受けやすいくかつてとは様相を異にする青年の姿=生き方に対する積極的な態度の喪失>という評価は、多様な社会に呼応するように細分化された個々の理論で現代青年を捉えようとするところから生まれた「成熟」社会が抱える苦悩の表象であるといえ、社会システムの変化や彼らの現状を勘案するならば、包括的に現代青年の様相を示しているものではないといえる。

以上、本稿においては、消極的な枠組みの中での現代青年へのアプローチという従来の視点を脱し、実存的な視座から現代青年の様相を包括的に考察した結果、彼らの生き方を積極的な側面から捉え直すことが可能となり、現代青年の様相を捉える上での1つの新しい機軸を見出せたといえる。